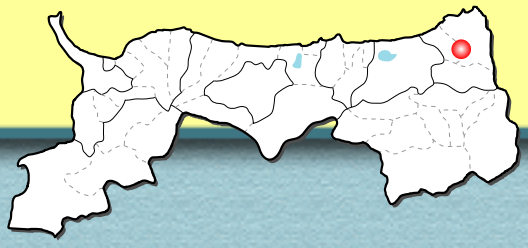
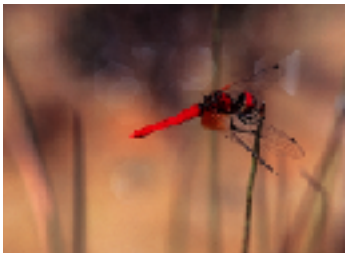
大沢池(おおさわいけ)

(鳥取県岩美郡(いわみぐん)岩美町(いわみ))



ハッチョウトンボの生息地

岩美町唐川地区には、その昔、大沢池がつくられました。その近くにある湿原（唐川湿原）は、カキツバタの群生と、ハッチョウトンボ（世界で最も小さいトンボに属する）の生息地として知られ、毎年多くの人々がこの地を訪れています。



ハッチョウトンボ「オス」

ハッチョウトンボ「メス」

この唐川湿原では、雪解けとなる４月上旬ごろから徐々に緑が芽吹き始めます。カキツバタが５月下旬から咲き始め、６月初旬を見ごろとして、中旬まで湿原を紫色に染めます。７月になると様々な植物が花を咲かせるとともに、ハッチョウトンボが飛び交い、湿原はにぎやかな時期をむかえます。

ハッチョウトンボは、体長２センチメートルたらずで、ため池やその近くの湿地帯に生息している小さなトンボです。ふつうのトンボを探す感覚では、見のがしてしまうほどの大きさです。

ハッチョウトンボ「羽化」

湿原に生息するこの小さな生き物を一目見たら、命の尊さと自然のすばらしさを感じることでしょう。

大沢の地にため池

岩美町唐川に、小倉勝次郎という人がいました。勝次郎は１８４０（天保１１）年４月６日に唐川の地に生まれ、若いときから大志をいだき、広々とした上野の原野を歩き回りました。その大志とは、地形を見きわめ、水の流れを考えながら、上野山頂の大沢というところに、柳池という大きなため池（面積１町５反＝１.５ヘクタール）をつくるというものでした。このため池は、銀３５０貫（現在の金額でおよそ３５０万円）という巨額の私財をなげうって、１８６３（文久３）年から１８７３（明治６）年にいたる１１年の歳月をかけつくられました。

完成後、ため池は、唐川村はもちろんのこと志保美村（現在の福部村）の水源涵養(注)地となりました。村人たちは水の恩恵を受けていることを喜び、勝次郎の功績をたたえました。

（注）水源涵養（すいげんかんよう）
水が自然に地下へしみこむことを言います。

自然環境保全地域を説明する看板

水田で虫とりをする子どもたち

上空から見た大沢池と唐川湿原

山野の開拓

勝次郎は、ため池の完成だけでなく、山野の開拓にも力をそそぎました。唐川や志保美村に１３．５ヘクタールの開墾地をつくり、その他に用水路をおよそ8.2キロメートル、耕作用の道路をおよそ８キロメートルつくりました。工事は１８６１（文久元）年から１８７３（明治６）年までかかり、工事費用は銀３５０貫必要となりました。工事にたずさわる人夫の数は、６,０００人を超えたといわれています。

地元への貢献

勝次郎は水田１４ヘクタール、畑１ヘクタール、山林２５ヘクタールを所有していました。しかし、ため池の工事費や開墾費用に私財を投じたため、彼の資産は田畑１ヘクタール、山林１０ヘクタールとわずかなものとなってしまいました。村人たちは、勝次郎の功績をたたえるとともに、耕地を増やし、村の活力を呼び起こしました。その結果、唐川村の人口は２倍以上になりました。しかし、第２次世界大戦後の高度経済成長にともない、唐川村は過疎の村となっていくのでした。

大沢池の恵みを受けるたな田

漏れる水が湿原を守る

唐川湿原を流れる大沢用水路は、上流の大沢池から山際を流れるおよそ２キロメートルの土水路で、７ヘクタールの下流の農地をうるおしていました。しかし、土水路であったことから水漏れが多く、農業用水として活用していくには水量が不足していきました。その上、年々農家の人口が減っていったので、水路を守っていくことが難しくなってきました。

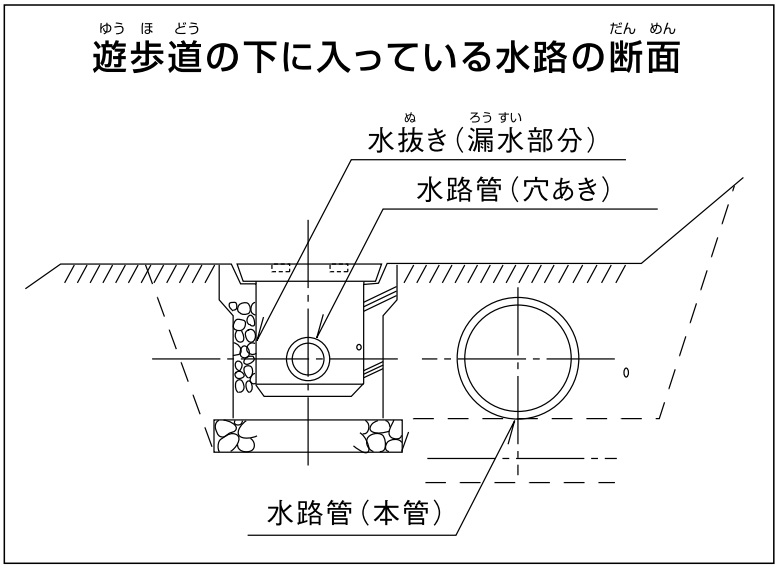
このままでは、土水路が埋まってしまい、この土水路から漏れる水で生息していたカキツバタがかれてしまいます。そのため、農業用水としての機能の確保だけでなく、カキツバタの生育も考えた水路の改修工事が必要となりました。

唐川湿原に生息するカキツバタ

そこで、湿原周辺のコナラなどの林を湿原のままにするように、コンクリート水路に穴を開けてわざと水が土にしみこむようにして、カキツバタの湿原を守ることにしました。

この工事は、１９９５（平成７）年から１９９６（平成８）年にかけて、遊歩道の整備なども併せて鳥取県が行いました。

こうして、現在でも、歴史と自然の残るすばらしい唐川の湿原が守られているのです。



遊歩道が整備された唐川湿原

唐川湿原の案内看板